

# 上級生への「憧れ」を核とし、 子どもの力で持続発展する学校文化を醸成

## 滋賀県 彦根市立佐和山小学校

「憧れ」をキーワードに、子どもたち自身が学校文化をつくり出し、学校が持続発展する仕組みを構築した滋賀県彦根市立佐和山小学校。上級生をリーダーとして伝統を継承していくことによって、学校への誇り、よりよい学校をつくろうとする意欲が、子どもたちに育まれている。

### 彦根市立 佐和山小学校 プロフィール

◎ 1900（明治33）年、青波尋常小学校として開校。「日本一あったかい学校」を目指して縦割り班活動や挨拶運動「あったか魂」などを展開。それらの取り組みは、独立行政法人教職員支援機構「第3回 NITS 大賞（2019年度）」を受賞した。

校長 麓 裕史先生  
児童数 約600人  
学級数 25学級  
（うち特別支援学級6）  
電話 0749-22-0863



### 自校に愛着と誇りを持つ 学校文化を根づかせたい

滋賀県彦根市立佐和山小学校は、北に石田三成の居城として知られた佐和山城跡、西に井伊家の彦根城を望む、児童数約600人の中規模校である。同校が、学校独自の文化を築くことを意識し始めたのは十数年前。当時の校長が子どもたちに学校や郷土への愛着と誇りを育みたいと、石田三成の旗印「一大一万大吉」を学校のシンボルマークにし、三成をモチーフにしたキャラクターを作成したのがきっかけだった。

教務主任の川端清司先生は、9年前に赴任した時、同校の課題を次のように感じていたと話す。

「本校は、毎年3～4割の教員が入れ替わり、若手教員の割合が年々増えている状況でした。教員の指導力向上や、落ち着いていても翌年は荒れるなどの生徒指導上の課題を抱える不安定な状態にあることが課題でした」

川端先生は、教員や子どもが変わっ

ても学校経営が安定するように、指導ノウハウを教員間で継承すると同時に、子どもたちの力で学校が持続発展する仕組みが必要だと考えた。そこで、着目したのが「学校文化」だった。

「高校野球の全国大会の常連校では、プレーする生徒が先輩の姿に憧れ、強豪校としての伝統を受け継いでいきます。『先輩のようになりたい』という思いがあるからこそ、厳しい練習にも耐え、高い目標に向かっていけると思います。小学校でも、上級生への憧れを喚起することで、子ども自身が主体的に伝統を継承していくような学校文化を醸成できるのではないかと考えました」（川端先生）

### すてきな上級生になれる秘訣を 6年生が5年生に伝授

最初に「憧れ」の対象としたのは、川端先生が赴任した2012年度の6年

#### お話を聞いた方



教務主任

**川端清司**

かわばた・きよし

2012年度、同校に赴任。2019年度、滋賀大学教職大学院修了。2021年度、滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課指導主事。



6学年担任

**林 知代**

はやし・ともよ

2014年度に同校に赴任。主に1年生と6年生を担当。研究教科は外国語教育。



5学年担任

**溝口 聡**

みぞぐち・さとし

2015年度に同校に赴任。主に高学年を担当。研究教科は体育科。

生だった。「当たり前のことを当たり前にする」を合言葉に、学年団の厳しくも愛のある指導を受けていた6年生の振る舞いは、下級生のロール

※プロフィールは、2021年3月時点のものです。

モデルとしてふさわしく、その姿を学校に残したいと、当時5学年主任だった川端先生は考えた。

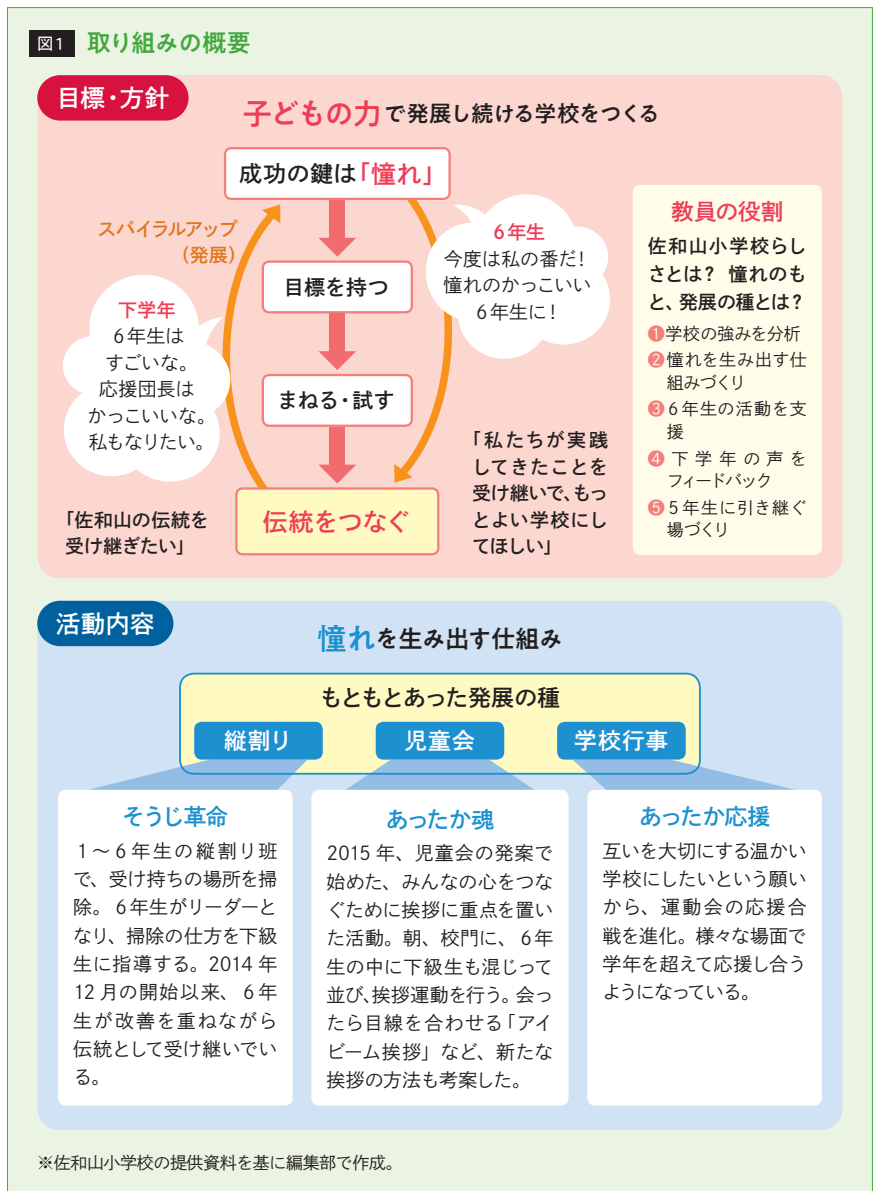
そこで、「どうしたらすてきな6年生になれるのか」と、5年生が6年生にインタビューする活動を行った。すると、6年生は、「当たり前ことができる」ことが大切で、「自分から挨拶する」「下級生に優しくする」など、日常の心がけが重要だと答えた。5年生は、6年生から聞いたことを報告し合い、学校をよくするために自分たちにできることは何かを話し合い、その結果を実践した。

「下級生が『6年生のようになりたい』という目標を持ち、6年生の姿をまねて行動し、実際に6年生になった時に自分の姿として実践することが、次の下級生の目標となります。そうしたサイクルが、結果的に伝統をつないでいくことになるのです(図1)。6年生へのインタビューは、今も5年生の『総合的な学習の時間』で、『佐和山リーダーになろう』として行っています」(川端先生)

同様のねらいから、同校では、6年生が活躍する姿を下級生に見せる場面を積極的に取り入れている。

6年生が最も輝くのが、運動会の色の組ごとに行う応援合戦だ。各学年3学級を赤・青・黄に分けて縦割りの組に編成し、各組の6年生から応援団長の男女各1人を選出する。運動会に先立って行われる色別結団式では、全校児童の前で、応援団長がマイクを使わずに声を上げて決意を表明する。その姿を見て、「6年生になったら応援団長になりたい」と憧れを抱く子どもも多い。

応援団長には、元気で声の大きい子どもが立候補することが多いが、下級生の時に抱いた憧れから、自分を変えて応援団長を目指そうとする



子どももいる。

「『人前で話すのが苦手でも、応援団長になれることを証明したい』と、応援団長に立候補した子どもがいました。たくさん練習をして臨んだ本番では、何度も言葉に詰まりながらも、一度もメモを見ることなく懸命に自分の思いを伝えました。その6年生の姿は、多くの下級生に勇気を与えました。それこそが、私たちが育成を目指している子どもの姿なのです」(川端先生)

## すべての6年生が輝く 縦割り班の「そうじ革命」

リーダーを経験する場は、6年生全員に設けられている。福井県の中学校の実践をモデルとして2014年度に始めた「そうじ革命」は、1~6年生の縦割り班による清掃活動だ。6年生をリーダーとし、班ごとに教室や廊下などの受け持ちの場所を毎日掃除する。

この取り組みも、子どもの期待感を演出することから始めた。川端先生が当時の子どもたちに、「自分たち

の力で学校を変えた、伝説の6年生にならないか」と呼びかけ、「数十年先まで続く取り組みを最初に行った学年になる」という期待感を持たせ、子どもたちの意欲を引き出した。教員がやらせるか、子どもが自らやりたいと思うかは、活動の成否を分ける、川端先生は考えている。

各班の6年生は、1～5年生を取りまとめ、雑巾の絞り方や床の拭き方を教えたり、掃除の段取りを指示したりするリーダーの役割を担う(写真1)。もちろん、すべての6年生が、初めからリーダーらしく振る舞えるわけではない。「総合的な学習の時間」や休み時間などに、「言うことを聞かない下級生がいる」「指示をうまく伝えられない」などの悩みを共有し、班を超えて解決策を話し合う。自分なりにどう班をまとめていけばよいかを考えながら行動する中で、リーダーとして成長していく。

「そうじ革命」の導入当初から指導にかかわってきた、6学年担任の林知代先生は、次のように語る。

「自分を出すのが苦手な子どもでも、試行錯誤する中でリーダーとしての自覚が芽生え、ぎこちないながらも一生懸命、班をまとめるようになります。すると、リーダーが自分たちのために頑張ってくれていると下級生も感じ、6年生を慕うように

なります。卒業式が近くなると、リーダーの周りに下級生が集まるようになるのも、そうした心の結びつきが生まれている証でしょう」

## コロナ禍においても子ども主体の文化をつなぐ

子ども主体の学校文化を築いてきた同校にとって、コロナ禍は伝統存続の危機だった。多くの学校行事が中止となり、子どもたちはどうせできないからと諦めがちになり、何をするにも教員に聞くようになっていた。子ども主体の学校づくりから逆行していく状況に、教員たちはもどかしい思いでいっぱいだったという。

やっと根づき始めた子どもの思いをつなげる学校文化は何としても守りたい。そう決意した教員たちは、校内に簡易手洗い場所を手作りし、コロナに負けない姿勢を子どもたちに示した。運動会の色別結団式は、人と人の距離を保てるよう、校庭に白線を引いて実施した(写真2)。「伝統の灯は絶やさない」「子どもたちを失望させない」という教員たちの熱意により、伝統をつないでいった。

運動会では、6年生の組体操を中止し、旗を使った演技を行うことにした。最初は見栄えがしないといって嫌がっていた子どもたちも、全体

の動きがそろっていくにつれて意欲を高め、本番の演技後は多くの下級生や教員に褒められて自信を持った。

2021年1月には、例年通り、学習成果を発表する「佐和山祭り」を実施。会場の設営や当日の運営はもちろん、入室前の手指の消毒や入場制限など、コロナ対策も子どもたち自身が考えて行った。

「臨時休業明けは意欲を失っていた子どもたちが、学校をよりよくしようと自ら行動を始めたのは、それまで培ってきた子ども主体の学校文化があったからだと思います。運動会や『佐和山祭り』などを通じて、コロナ禍でもできることがあると実感した子どもたちは自信を深めています」(林先生)

## 2つの指導力向上策で若手教員を伸ばす

持続発展する学校づくりを支えるため、教員の指導力向上策も工夫する。「かもCクラブ」は、有志の教員が不定期で放課後に集まり、15分間程度、日頃の悩みを語り合う場だ。「宿題はさせるべきか」「忘れ物を繰り返す子にどう指導すればよいか」「給食は何時何分まで食べさせるか」など、若手教員ならではの疑問が飛び交う。

「校内で若手教員の比率が高まるに



写真1 1～6年生の縦割り班で行う掃除では、まず黙想して心を落ち着かせる。そして、リーダーの6年生が今日のめあてを示してから掃除を始める。



写真2 運動会は、人と人の距離を保つ目印となるよう、校庭に2メートル間隔に白線を引いて実施した。

図2 5年生が書いた作文「私のこの一年」



2020年度の1年間を振り返る作文には、5年生の立場で心がけてきたこと、そして6年生になった時の目標がつけられている。

※佐和山小学校の提供資料をそのまま掲載。

つれ、従来は暗黙知として受け継がれていた指導ノウハウが継承されにくくなる状況を危惧していました。若手教員がちょっとしたことで気軽に相談でき、自信を持って教壇に立てるようにしようと、『かもCクラブ』を始めました(川端先生)

2020年度は、コロナ禍で「かもCクラブ」を実施できなかったが、2021年度は実施を予定している。

「課題別研究チーム」は、教員が自らテーマを考え、同じ課題を持つ教員同士で共同研究を行う取り組みだ。2020年度は、育成を目指す資質・能力に「人とよりよくつながるためのコミュニケーション能力」を掲げ、それを育むための授業づくりを主題に設定した。そして、コロナ禍においても、「発問の工夫」「単元を貫く授業展開」など、テーマごとに7つのチームに分かれて研究を行い、年度末に発表会を行った。

「課題別研究は4～5人の少人数の

チームで行うので、若手教員や赴任してきたばかりの教員でも発言しやすい雰囲気になり、率直な意見交換ができます。また、研究紀要をまとめることに重点を置かず、発表会で他者意識を持ってプレゼンテーションを行い、多様な視点を共有することを最重要視しています。その結果、経験年数に関係なく、教員が自身の成長を実感できる有意義な研修の場になっています(林先生)

### 築き上げた学校文化を 継続する鍵は教員の意識

「憧れ」を喚起し、伝統をつなぐ取り組みを始めて10年。子どもたちは、自校に愛着と誇りを持っている。

「子どもたちに本校のよさを聞くと、次々に答えが返ってきて驚かされます(林先生)

1年間を振り返る作文では、多くの子どもが学校行事や授業のことよ

りも、上級生への憧れやなりたい6年生像をつづっている(図2)。

子どもが築き上げてきた学校文化を継承するためには、教員のかかわり方も重要だ。5学年担任の溝口聡先生は、次のように語る。

「本校に赴任した5年前、伝統をしっかり次につなげなければならないといった焦りから、私は子どもに型通りに掃除や挨拶をさせることばかりを考えていました。子どもの願いよりも、教員の思いを押しつけてしまい、周りの先生方とも足並みがそろっていませんでした。しかし、子どもが学校をよりよくしたいと思って行動するのなら、これまでの形にこだわる必要はないと考えるようになってから、先生方との連携をスムーズに取れるようになりました」

川端先生も、学校文化を継承していくためには、教員の意識が鍵になると語る。

「この10年間は、子ども主体の取り組みが、本校の伝統としてしっかり根づくまでの過渡期だったと捉えています。今後も、取り組みをただ継続するだけではやがて形骸化してしまうでしょう。子ども同士をつなぐ工夫や、教員の指導力を高める取り組みなどの『流行』を絶えず取り入れて試行錯誤し、子ども主体の活動で学校をよりよくしようとする魂を、『不易』のものとして伝えていくことが、本校が持続発展し続けるために必要だと考えています」

Web VIEW n-express もご覧ください

ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト内の「VIEW n-express」コーナーでは、「そうじ革命」を全校に広めた経緯や、教員研修の進め方などを紹介した記事を掲載しています。

VIEW n-express 検索

右記の2次元コードからもアクセスできます。▶▶▶

